

学位論文題名

The concept of openness
in the architectural and urban context

(建築・都市空間における開放性の概念に関する研究)

学位論文内容の要旨

本論は、壁やフェンス等の閉鎖され囲われた物質的な範囲とは対照的に、非物質的で開放された空間等、他のあらゆる概念をもたらす概念、すなわち開放性に焦点を当てながら、建築・都市空間をデザインする過程を調査し、建築空間のデザイン過程や人間の多様な要求や文化的・社会的な特性に対応する、開放性の概念の役割と方向性を示す。

空間は、遠心的であり、また二つの方向性に向かっている。一つは象徴としての垂直軸であり、もう一つは拡張の方向性を示す水平軸である。これらは人間の空間を特徴づける要素である。統一性と変容性、隔離と自由、開放性と閉鎖性に対する人間の要求を充足させるために、範囲と空間、出口と入り口、内部と外部の間で、また空間と時間との干渉の間で、人間は持続的に発展していく。人間はこの間のなかで、立ち、休み、行動するが常に中心部に戻る。本論では、空間と時間を干渉する“間”の空間と二つの空間の間としての開放性に関する研究である。

本論は4章からなる。

1章では、開放性の意味と、それに関する全ての概念の必要性について論ずる。開放性の意味を、人間の知覚、知覚の哲学、また空間に対する現象や人類学に含蓄される意味から理論的に要約する。Marleau Ponty、Heidegger、Jean Cousin、Christian Riccordeauらの空間に対する知覚の研究を参照とする。ハイデガーによると、科学は世界の関係性を理解する第二の形式であり、形而上学の超越を参考とする必要がある。このような形而上学の考慮の超越を通して、科学は厳密に何もないものに対しての見解が説明できる。

これらのアプローチによって、開放性、ヴォイド、空虚性が閉鎖性の概念や範囲の概念に深く関連していることが基本となることが分かる。

開放性は人間の体を動かす上での外部であり、範囲を認識する機能がある。それは仮想的な概念でもあるし、私達を取りまく物理的なコンクリートの壁でもある。

実際の生活の経験において、開放性の表現や、開放性と閉鎖性の調和は、見え隠れや明暗、

静と動のように多くの意味を含蓄している。

2章は、実存する建築における概念を導き出すことによって、開放性に対する法則を研究する。本章では、内部や外部の多様性に応じて、機能的な必要性から形成された開放空間の多様性を分析する。

2章は、二つの節から構成される。1節では、伝統的な建築と現代的な建築、また異なる文化を持つ西欧と中東において概念を導くことによって開放性に関する研究を行う。2節では日本における伝統的な建築と現代的な建築に関する研究を行う。

3章は、都市空間における概念を導き出すことによって、開放性に対する法則を研究する。本章も同様に2節から構成される。

1節では、開放性の概念と、都市の伝統的、現代的な場を世界の異なる場において、また、中外の関係の多様性によって、開放性と閉鎖性の構成要素の分析を行う。

2節では、伝統的、現代的な場における内部と外部の関係性の進展、また開放性を通じた明瞭な表現の分析を行う。本節では、開放性と日本特有の空間性の関係について焦点を当てる。日本の“間”の意味、ヴォイドや空虚性の概念、移動空間、連続的で統計的な空間に配慮する。

4章は本論の結論である。

開放性の概念を理解することによって、建築・都市空間の概念に基づいて実行する前に、ある範囲の中で感覚や体の動きの拡張として開放性が定義され、人間性の構築における開放性/閉鎖性の二つの次元に気づくはずである。

2章の結論：建築空間においてその必要性を満たし、外部としての人間の要求との関係性をつくるために開放性を利用することによって、多様な回答が得られ、それは多くのパラメータによるものである。パラメータとして社会文化的な文脈、物理的な文脈、気候・機能的な文脈、具現化され利用された技術があり、最終的には考慮すべきこととして結びつく。本章を通して開放性がどのようにして、周辺環境（物質、色彩、地形、植生、季節、気候、光などの物理的な文脈や社会文化的な文脈の集積）や、外部空間の質を形成しているかがわかり、内部における異質の空間を感じさせることがわかる。

4章の結論：都市空間において、開放性の概念が重要で多様な意味をもたらすということがわかる。建築的な文脈における役割と同様に、都市の文脈においてもまた役割を果たす。本章の目的は、開放性の役割と、伝統的な古代における概念との関係性、現代都市空間におけるそれらの適合の方向性の分析である。その特例として日本を事例として挙げる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 林 英 嗣

副 査 教 授 鏡 味 洋 史

副 査 教 授 奥 俊 信

学 位 論 文 題 名

The concept of openness in the architectural and urban context

(建築・都市空間における開放性の概念に関する研究)

本論は、現代都市空間の混乱や錯乱が指摘される中で、①空間の閉鎖性と常に同時存在する、‘空間の開放性’に焦点を当て、②建築と都市の秩序を類型的に整理し、③建築と都市の空間構成上の特徴を西欧と日本の間で比較分析し、④文化的・社会的な特性と対応させ、建築と都市の空間を通層する認識論にもとづいた総合的で一体的な構成秩序を再生する方向性を論じている。本論は序章を含み5章から成り、以下に各章の要約を記す。

序章では、研究の背景と問題意識を整理し、目的、方法について述べている。

第1章は、本研究を支える主要な概念である開放性の意味と概念を述べている。開放性の意味をメルロ・ポンティ、ハイデッガー、クリスチャン・リカドウらの空間知覚現象学の研究にもとづいて整理し、人間知覚、知覚哲学、人類学からも多面的に‘開放性’を定義し、空間の‘開放性’は‘空隙’‘空虚’とは区別され、空間の閉鎖性と領域性に深く関連していることを述べている。開放性は人間の知覚や行動の外延化であり、同時に領域を認識する機能も備え、開放性の表現、開放性／閉鎖性の調和は、見え隠れ、明暗、静動などのきわめて多くの意味を含蓄していることを述べている。

第2章は、現実の建築空間を類型化することによって、開放性概念の実用性と有用性を述べている。特に、景、光、大気、音、移動という5つの機能的な要因から規定され、形態、様相、デザインなどが調整された建築空間における開放性の類型化とその多様性を分析している。第1節では、西欧と中東の建築空間における諸事例を通して開放性なる概念に基づいた建築言語の存在と多様性を述べている。第2節では日本における伝統的な建築を事例とした空間の開放性について記述し、日本的空間の開放性の特徴は、外部環境やランドスケープと結びついた景と光、そして建築群の構成手法に起因すると言及している。建築空間における‘開放性’による多様な建築言語の存在を捉え、体系的に整理を行っている。その結果、1) 社会文化的な文脈、2) 物理的な文脈、3) 気候・機能的な文脈、4) 地域の建築技術、などのパラメータによって多様性が生み出され、最終的には建築空

間を規定する重要な構成要素として存在している。そして空間の開放性は、環境（光、素材、色彩、地形、植生、季節、気候などの物理的環境、そして社会文化的な文脈の集積による環境）や外部空間と呼応しながら、建築空間の質と外部空間（＝都市空間）の質を同時に規定する、重要な概念であり要因であると述べている。

第3章は、西欧と日本の都市空間を開放性の視点から捉え、各々の特徴について述べている。第1節では西欧と中東の伝統的建築と近代建築を対象とした分析から、開放／閉鎖性と公／私性の視点により都市空間要素である建築を5つに類型化している。同一タイプの伝統的建築の集合秩序によって形成されていった都市空間が、異なるタイプの現代的建築がインフィルされることによって、その秩序を失いつつあることを指摘し、その現象が西欧、中東、日本に共通して見られる過渡的な変容であると位置づけている。第2節では、空間実態調査により、開放性から見た日本特有の空間性について焦点を当て、日本の‘間’感と‘奥’性にもとづいて、幾何学的空間と併存する連続的で洗練された空間の分析を行っている。特に日本の歴史的な集落における空間構成の分析から、都市的空間秩序の原型は①房型、②線型、③偶発型の構成であることを述べ、さらに a)幾何学的秩序と‘間’感を加えた b)洗練の秩序の類型化とその要因に踏み込んでいる。日本特有の都市空間は、建築の多様な開放性を駆使した建築群によって、分節化された小都市空間の秩序を創出し、その集合によって、多様性と複合性のある都市空間全体の秩序を形成してきた歴史があり、閉鎖性の高い建築の集積した西欧や中東の都市空間とは対峙する構成と形成の過程を示している。しかし、今日の西欧や中東の現代建築に見られる空間的開放性の高まりは、複雑化や無秩序化を示す傾向がみられ、多様性と複合性にもとづいた都市デザイン論の必要性を指摘している。都市空間の秩序性は建築のもつ開放性に大きく依存しており、建築空間の開放化が極度に進行している今日的な都市空間の生成過程において、‘間’感と開放性概念にもとづいた‘建築から都市を通底しうる空間の認識論と構成論’は、西欧、中東、日本で見られる歴史的建築秩序と現代的建築秩序の混在する状況下において、空間論による都市空間の新たな秩序化の方向性に、大きな意味を持っているとまとめている。

第4章は、本研究で得られた知見を総括した結論および今後の課題をまとめている。すなわち、建築および都市を横断的、一体的に論じうる空間認識概念とその有用性を示し、今後の課題とその方向性を示している。

これを要するに、これまで共有しうる空間構成概念が少なかった建築空間論と都市空間論において、‘間’感は現象、秩序観、構成論から見て、両者を通底しうる認識論であり生成論であることを、事例を通じて整理、提案したものであり、都市空間計画学、都市デザイン学、建築意匠設計学に貢献するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格があるものと認める。